

2015 年度

金城学院大学自己点検・評価報告書

金城学院大学 自己評価委員会

目次

金城学院大学自己点検・評価報告書について	・・・ p.2
----------------------	---------

2015 年度 活動報告

学長室	・・・ p.3
大学FD委員会	・・・ p.4
大学教務委員会	・・・ p.5
大学入試委員会	・・・ p.7
大学学生生活委員会	・・・ p.8
図書館委員会	・・・ p.10
キリスト教センター委員会	・・・ p.12
国際交流センター委員会	・・・ p.14
マルチメディアセンター	・・・ p.16
言語センター	・・・ p.17
文学部自己評価委員会	・・・ p.18
生活環境学部自己評価委員会	・・・ p.19
国際情報学部自己評価委員会	・・・ p.20
人間科学部自己評価委員会	・・・ p.21
薬学部自己評価委員会	・・・ p.22
文学研究科自己評価委員会	・・・ p.23
人間生活学研究科自己評価委員会	・・・ p.24

金城学院大学自己点検・評価報告書について

金城学院大学

学長 奥村 隆平

金城学院大学では、教育研究の質の向上と社会的責務を果たしていくために金城学院大学自己評価委員会を中心として毎年自己点検・評価を実施しています。

これまでは、認証評価機関による評価を受けた際の自己点検・評価及び認証評価機関による大学評価結果をまとめた「WINDOWS」を発行し、公表してまいりましたが、2015年度より、毎年行っている自己点検・評価活動をまとめた「自己点検・評価報告書」についても公表することにいたしました。

この「自己点検・評価報告書」は、各委員会や各部署における活動報告と評価コメントで構成されています。

大学自己評価委員会では、毎年3月に各委員会等で策定された次年度「活動目標」(Plan)について審議をします。この活動目標に基づき各委員会等で1年間活動を行い(Do)、その結果を2月に「活動報告」としてまとめます。その後、学内評価者による評価・検証と自己評価委員会での審議を経て(Check)、次年度の活動につなげていく(Action)というシステムをとっています。

本学では、大学自己評価委員会を中心にPDCAサイクルを十分に機能させることにより、教育に関する内部質保証を確立することを目指しています。

2015年度 活 動 報 告

所 属	学長室	職 名	学長	氏 名	奥村隆平
<p>【2015 年度活動目標】</p> <p>(1) 学生および教職員への建学の精神の周知</p> <p>(2) 共通教育運営体制の確立</p> <p>(3) 学長を中心としたガバナンスの整備</p> <p>(4) KIDS センターの設置</p> <p>【上記活動における報告】</p> <p>(1) 学生および教職員への建学の精神の周知 学生に対しては、全1年生必修の「キャリア開発A」において、学長が本学の教育スローガンや歴史について講義を行った。教職員に対しては、学長が全教員にメールでキリスト教セミナーへの参加を促した。</p> <p>(2) 共通教育運営体制の確立 共通教育を運営する組織の在り方や人事枠の取り扱いについて、改めて教務関係者とも種々協議した。</p> <p>(3) 学長を中心としたガバナンスの整備 学内の意思決定プロセスについて、現行の体制を尊重した上で、特に各教授会の議事については学部長会での報告了承をもって学長決定とする体制整備を行った。</p> <p>(4) KIDS センターの設置 10月より正式にオープンした。利用ルールについては利用規程及び利用料規程として制定し、開設に向けては運営委員会が中心となって地域の親子が快適かつ効果的に利用できる環境を整備した。</p>					
<p>(1) 入学して間もない1年生全員に対して、学長自らが本学の教育スローガン及び歴史について講義を行ったことは、愛校心を培い建学の精神を理解する上で非常に効果的であったものと高く評価できる。</p> <p>(2) 大学教育の基盤である共通教育の運営体制を確立することは、極めて重要であり、その実現に向けて着実に準備が進められている点は評価できる。</p> <p>(3) 学内の意思決定プロセスを整理し、これを明確化した点は一定の評価に値する。</p> <p>(4) KIDS センターの設立は、幼児教育の推進及び地域の発展に大いに貢献するものであり、高く評価できる。</p> <p style="text-align: right;">(評価者：森田順也)</p>					

2015年度 活 動 報 告

所 属	大学FD委員会	職 名	委員長	氏 名	奥村隆平
<p>【2015年度活動目標】</p> <p>(1) 本学における教員像の位置づけの検討</p> <p>(2) 学生に対する研究倫理教育実施に向けた啓発</p> <p>【上記活動における報告】</p> <p>(1) 本学における教員像の位置づけの検討</p> <p>これまでに話し合ってきた学科の教員像に基づき、「学部の教員像」をまとめるよう依頼をすすめてきたが、学科間で学問領域が異なる場合など、意見整理が非常に困難であることがわかった。一方、策定した教員像の活用法として、今年度より専任教員の公募書類にある「応募条件」に加えて「学科の求める教員像」という項目を作成するよう依頼した。学位・職歴・専門領域だけではなく「求める教員像」を併記することで、学科の意思を明確にし、候補者とのマッチングを高めることを目的としている。今後、書式の統一を含めて活用法を更に検討する。</p> <p>(2) 学生に対する研究倫理教育実施に向けた啓発</p> <p>学生に対する研究倫理教育実施に向け、2015年4月1日適用となった文部科学大臣決定「研究活動における不正行為への対応等に関するガイドライン」に則り、まず教員全体で「研究倫理教育をめぐる現状と今年度の取り組み」と題したFD交流集会を実施した。全教員に日本学術振興会編集の『科学の健全な発展のために—誠実な科学者の心得—』テキスト版を配布、解説し、理解度アンケート・研究倫理教育受講報告書の回収を行った（回収率：96.6%）。またFD交流集会後、大学院生全員に同一のテキスト（受講ガイド付き）を配布し、理解度アンケート・研究倫理教育受講報告書の回収を行った（回収率：90.8%）。今後、定期的に研究倫理教育を実施する予定である。</p> <hr style="border: 0.5px solid black; margin: 20px 0;"/> <p>(1) 教員像の位置づけを検討する中で、「学科の求める教員像」をまず確認し、その活用法を検討しながら、本学における教員像を浮き彫りにしていこうとする作業には意義があり、評価される。</p> <p>(2) 「研究活動における不正行為への対応等に関するガイドライン」に則り、短期間にのうちにまず教員間で研究倫理を再確認し、引き続き大学院生を対象に研究倫理教育を計画、実行したことは評価される。</p> <p style="text-align: right;">（評価者：大原直樹）</p>					

2015年度 活 動 報 告

所 属	大学教務委員会	職 名	委員長	氏 名	青 柳 裕
<p>【2015年度活動目標】</p> <p>(1) 履修登録単位数上限（CAP制）の見直し</p> <p>(2) 授業外学習時間の確保に向けた方策の検討</p> <p>(3) 学修支援の検討</p> <p>(4) 教学に関するスケジュールの見直し</p> <p>【上記活動における報告】</p> <p>(1) 履修登録単位数上限（CAP制）の見直し</p> <p style="padding-left: 2em;">授業外学習時間の確保と教職課程を含めた資格関連科目の履修保証など様々な角度から適正な履修登録単位数上限（CAP制）の検討を行った。その結果、2016年度入学生から適用するCAP制の新基準を策定し、実施に向けて履修規程の一部変更を行った。</p> <p>(2) 授業外学習時間の確保に向けた方策の検討</p> <p style="padding-left: 2em;">単位の実質化に向けて、これまで以上の授業外学習時間の確保にむけた方策の検討を行った。今年度実施した「授業外学習時間確保に向けた取り組み等に関する調査」から、回答を寄せた教員のほとんどが授業外学習時間確保に向けて何らかの工夫をしていることが明らかになった。一方、2015年度学習と学生生活アンケート結果から授業外学習時間が2012年度の同様の調査から大きく増加していることがわかった。以上の結果を踏まえ、全教員に対して授業外学習時間の量の確保と質の向上に向けて一層の努力をお願いする文書を配布することにした。</p> <p>(3) 学修支援の検討</p> <p style="padding-left: 2em;">学生の学びを支援するため、学修支援授業計画書（仮称）並びに「身につくちから」の専門教育科目への導入可否の検討を行った。その結果、いずれも現時点での早急な導入を見送ることにし、将来的に再度検討することにした。</p> <p>(4) 教学に関するスケジュールの見直し</p> <p style="padding-left: 2em;">単位の实質化に向けた授業15週と試験期間1週の実施は、一定の効果をあげているものの、一方で教学に関するスケジュールが過密になるなどの様々な問題を抱えている。そこで、2017年度からは、補講を授業の空きコマ、土曜日、ICTを用いた遠隔授業などで実施し、収まらない場合6限を補講時間として利用することで教学スケジュールを計画することを確認した。又、遠隔授業で補講を実施する場合の条件を整備した。</p>					

4項目の活動目標のうち、3項目については設定した活動目標をほぼ達成できている点が高く評価できる。

(1) について、CAP 制の見直しによって授業外学習時間の確保や資格関連科目の履修保証など、科目履修において効果的な登録ができるようになった点が評価できる。今後の学生の学力向上に期待したい。

(2) について、授業外学習時間は学習内容習熟度の向上を図るうえで極めて重要であり、教員の工夫によって学生の授業外学習時間が大きく増加する成果が得られたことは高く評価される。今後は授業外学習のさらなる質的向上に資する次年度以降の具体的方策の策定を期待したい。

(3) について、学生の学びを支援する学習支援授業計画の立案、「身につくちから」の専門教育科目への導入はどちらも重要な課題ではあるが、導入にはさらなる十分な検討が必要と考えられる。

(4) について、補講時間を無理なく確保できる教学スケジュールの立案、特に遠隔授業について通常授業と同質の内容が担保できる条件の整備は高く評価できる。

(評価者：塚本 喜久雄)

2015年度 活 動 報 告

所 属	大学入試委員会	職 名	委員長	氏 名	奥村 隆平
<p>【2015 年度活動目標】</p> <p>(1) 一般入試、センター試験利用入試による入学者割合の適正化</p> <p>(2) 「入試5か年計画」終了後の入試に関する中期計画のあり方の検討</p> <p>(3) オープンキャンパスの開催方式の見直し</p> <p>【上記活動における報告】</p> <p>(1) 一般入試、センター試験利用入試による入学者割合の適正化 2015年6月23日開催の大学入試委員会において、2016年度各学科入学者目標確保数について確認した。また、大学入試委員会が学部・学科ごとに、各種入学試験の可否判定に際し、適切な入学者数確保という条件の範囲内で可能なかぎりの調整を図っている。</p> <p>(2) 「入試5か年計画」終了後の入試に関する中期計画のあり方の検討 「入試5か年計画」の達成状況は、2015年度入試では入学者数の確保はできているものの改善の余地がある。そのため2015年11月24日に次の入試戦略として金城学院大学「入試3か年計画」（2017年度入試～2019年度入試）を示した。</p> <p>(3) オープンキャンパスの開催方式の見直し 従来5回実施してきたオープンキャンパスの開催を3回にした。新たに一般・センター入試を受験する生徒を対象に12月12日（土）に入試直前対策講座を実施した。3回実施したオープンキャンパスでは、すべて2014年度のオープンキャンパスを上回る参加者であった。</p>					
<p>(1) について、各種入学試験において、可能なかぎりの調整を図って適切な入学者数確保に努めていることは評価できる。今後も継続して入学者の確保に努力して頂きたい。</p> <p>(2) について、「入試5か年計画」終了後、引き続き「入試3か年計画」が示されたことは評価できる。新たな入試戦略を期待する。</p> <p>(3) について、オープンキャンパスの開催を3回に減らし、教職員の負担が軽減された上に、参加者が2014年度よりも多かったことは大いに評価できる。また、受験者数の確保のために、2014年度から実施された入試直前対策講座が継続して実施されることが望まれる。</p> <p style="text-align: right;">(評価者：平林由果)</p>					

2015年度 活 動 報 告

所 属	大学学生生活委員会	職 名	委員長	氏 名	鈴木正隆
<p>【2015年度活動目標】</p> <p>(1) 学生相談室体制の再構築</p> <p>(2) 『K-カルテ』システムの再構築</p> <p>(3) 快適なキャンパス生活</p> <p>(4) 就職活動の不安軽減施策</p> <p>(5) 就職活動における先輩・卒業生の活用</p> <p>(6) 学生組織と協働した学生生活の向上</p>					
<p>【上記活動における報告】</p> <p>(1) 学生相談室体制の再構築</p> <p>2015年度より年2回の学生相談室運営委員会を機能させ、スクールカウンセラーを中心とした相談学生への迅速かつ組織的サポート体制を確立させた。加えて外部医療機関との連携を促進させることで、相談者の延べ人数は2014年度に比較して375名の減となった。</p> <p>(2) 『K-カルテ』システムの再構築</p> <p>K-カルテの安全性、機能、利便性について総合的に検討し、同カルテを2016年度よりK-PORTの追加機能として運用開始することとした。</p> <p>(3) 快適なキャンパス生活</p> <p>キャンパス内の計24箇所に防犯カメラを設置するとともに、キャンパス改修・新築工事の進展に併せた警備体制の再編を適宜進め、安全で快適なキャンパス生活の確保に努めた。</p> <p>(4) 就職活動の不安軽減施策</p> <p>就職活動が本格化する前に、予め就職活動全体をイメージすることで不安を軽減させることを狙いとして、新たに「1DAY就活全部体験講座」、「就活すごろく」、「一次面接から最終面接までを連続して体験させる集団模擬面接」等、計5件の取り組みを実施した。</p> <p>(5) 就職活動における先輩・卒業生の活用</p> <p>既存の取り組みに加え、内定を受けた4年生や卒業生の協力を得て、「パネルディスカッションの開催」、「元就活サポーターOG懇談会」、「地方公務員OG懇談会」、「アンケート実施と集約資料の学生配布」、「短期業界研究会の発足」の計5件の取り組みを新たに実施した。</p> <p>(6) 学生組織と協働した学生生活の向上</p> <p>リーダーズオリエンテーションを廃止し、学生生活の向上、地域貢献等を目的に多様なイベントや体験型プログラムをクラブ、サークル及び学生会と協働して計画、実施した。その結果、「はいかい高齢者おかえり支援事業模擬訓練」等計12件のボランティア活動を実施した。加えて、教員参加型のイベントや体験型プログラムを11件計画、実施するなど、課外での</p>					

多様な取り組みを主催した。いずれも参加学生には大変好評であった。

(1) 学生相談室体制の再構築

学生相談室運営委員会を機能させたこと、スクールカウンセラーの活用や外部の医療機関との連携をすすめたことは、評価できる。

(2) 『K-カルテ』システムの再構築

今後も適切に、セキュリティ管理をしていただきたい。

(3) 快適なキャンパス生活

本学は女子大学のため、防犯カメラの設置と警備体制の再編は重要であり、評価できる。

(4) 就職活動の不安軽減施策

毎年就職活動のスケジュールが変わるなかで、就職活動の不安軽減施策は評価できる。

(5) 就職活動における先輩・卒業生の活用

内定を受けた4年生や卒業生からの助言の活用は、評価できる。

(6) 学生組織と協働した学生生活の向上

学生が大学で成長するうえで、学生の主体性を活かした体験型プログラムは評価できる。

(評価者：柴田謙治)

2015年度 活 動 報 告

所 属	図書館委員会	職 名	委員長	氏 名	出町 克人
<p>【2015年度活動目標】</p> <p>(1) 読書奨励活動の推進 (2) 地域連携活動の推進 (3) 図書館の「空間」整備</p> <p>【上記活動における報告】</p> <p>(1) 読書奨励活動の推進</p> <p>2015年度の読書奨励活動は、「本をたくさん読む」、「本の世界に興味を抱く」、「深く読む」を目標としてきた。多読奨励としては、読書ラリー、「2015今週の1冊」やブックログ（電子書棚）掲載本紹介コーナーの充実、多読本コーナーの新設があげられる。書籍への興味づけでは、和綴じ豆本づくり講座、受賞作を三省堂名古屋高島屋店で配布する学生デザインのブックカバーデザインコンテスト、大学祭模擬店（リリィ書房）を開催した。深い読書の奨励に向けては、ビブリオバトル、怪談読書会、「旅」をテーマとする読書会、ライブラリーカフェ、全6回に及ぶ「森の中の図書館読書会」を実施した。</p> <p>(2) 地域連携活動の推進</p> <p>公立図書館との地域連携活動を、図書館の学生サポート組織「リリアン」と共に推進した。瀬戸市立図書館では「YUMEZORA」をテーマに、来館者の夢を風船型の台紙に書いて貼り付ける壁面大型展示と、中高生の夢を応援するための推薦図書を紹介展示を行った。名古屋市守山図書館との連携活動は「本の帯」作りの中で、イベント参加した小学生の支援活動を行った。また、この企画と関連して守山図書館長へのインタビューも行った。名古屋市志段味図書館との連携企画は「ティーンズコーナーおススメ本展示」で、中高生向けの推薦図書と紹介POPの展示を行った。</p> <p>いずれの連携活動も各種マスコミに取り上げていただき、好評であった。地域連携活動を通じて「リリアン」に所属する学生たちの成長につなげることができた。</p> <p>(3) 図書館の「空間」整備</p> <p>学生にとって快適に学習や読書のできる居心地のよい図書館整備に向けて、学生アンケートを実施した。静かな学習・読書環境を求める声が数多く寄せられた。また、レポート作成のためのパソコン使用の需要が高いことも判明した。アンケートの結果を、今後の図書館の「空間」整備に役立てていきたい。</p>					

(1) について、多読奨励、書籍への興味づけ、深い読書の奨励という重要な課題に向けて、それぞれ具体的な活動を精力的に行っていることが評価できる。

(2) について、3つの公立図書館と地域連携活動を行い、情報発信とともに学生の成長にもつながったことは意義深い。

(3) について、学生アンケートの実施は貴重な作業であるが、静かな環境やパソコン利用へのニーズは、逆に現状の問題点をも示しており、今後の改善が望まれる。

(評価者：河野裕康)

2015年度 活 動 報 告

所 属	キリスト教センター委員会	職 名	委員長	氏 名	小 室 尚 子
<p>【2015年度活動目標】</p> <p>(1) 礼拝の励行 (2) キリスト教活動の充実 (3) 建学の精神の確認 (4) 大学のキリスト教活動についての史料収集と整理</p> <p>【上記活動における報告】</p> <p>(1) 礼拝の励行</p> <p style="padding-left: 20px;">学生達の礼拝参加を促すために、以下のような方法を試みた。</p> <p style="padding-left: 20px;">① 礼拝堂の入口外に、毎日、礼拝説教者と説教題の掲示板を設置した。</p> <p style="padding-left: 20px;">② 2016年1月には、卒業予定者全員に葉書で礼拝出席を呼びかけ、またゼミの教員方にも協力をお願いし、対象者については延べ60名の出席があった。</p> <p style="padding-left: 20px;">③ クリスマス行事の期間には、日々の礼拝で小カードを配布し、一定枚数集めた者に金城グッズ（学生支援センターの協力による）をクリスマス祝会でプレゼントするという試みを行った。</p> <p style="padding-left: 20px;">これらの結果、礼拝出席者数については、昨年度比7.5%（延べ1000名）出席率を上げることができた。</p> <p>(2) キリスト教活動の充実</p> <p style="padding-left: 20px;">1) 礼拝堂でのコンサートの充実</p> <p style="padding-left: 40px;">2015年度は、とくに礼拝堂でのオルガンコンサートを充実した。キリスト教の時間では日本を代表する演奏家によるレクチャーコンサートを開催し、他にアドベントオルガンコンサート、またオルガニスト養成講座受講生によるコンサートも開催することができた。</p> <p>(3) 建学の精神の確認</p> <p style="padding-left: 20px;">2015年度は校歌が作られて100年となる節目の年であり、とくに校歌の歌詞を主題とした伝道週間や、その期間には毎日礼拝で校歌を歌うなど、学生には校歌を活かして建学の精神の確認に努めた。教職員に向けてのアピールがなお課題である。</p> <p>(4) 大学のキリスト教活動についての史料収集と整理</p> <p style="padding-left: 20px;">2014年度に引き続き、キリスト教センター活動の全般について（とくにハンドベルクワイアおよびクワイアの活動の歴史を中心に）の史料収集を続行した。</p>					

- (1) 学生の礼拝参加を促すために掲示板を設置したり、卒業予定者全員に葉書を出すなど、きわめて積極的な活動を行ったことは大いに評価できる。また、礼拝の参加者が昨年比 7.5%も増加したことはこの上なく喜ばしいことである。高く評価できる。
- (2) キリスト教の時間に、日本を代表する著名演奏家を招いてオルガンコンサートを開催したことは高く評価できる。
- (3) 大学では校歌を歌う機会がすくないので、伝道週間には毎日礼拝で校歌を歌う試みは大変良いことである。大いに評価できる。
- (4) 長年に渡る本学のキリスト教センターの活動のうち、ハンドベルクワイアおよびクワイアの活動の史料収集を引き続き行ったことは非常に評価できる。引き続き継続されることを切望する。

(評価者：山川仁)

2015年度 活 動 報 告

所 属	国際交流センター委員会	職 名	委員長	氏 名	日詰 慎一郎
<p>【2015年度活動目標】</p> <p>(1) 国際交流センターの危機管理体制の整備</p> <p>(2) 国際交流センターが担当する新規共通教育科目（3科目）の導入と改善</p> <p>(3) 本学協定校との連携強化と情報発信</p> <p>(4) 受入れ留学生への支援拡充と情報発信</p> <p>(5) 学生の多様なニーズを満たす留学プログラムの検討</p> <p>【上記活動における報告】</p> <p>(1) 国際交流センターの危機管理体制の整備</p> <p style="margin-left: 2em;">1) 災害時の受入れ留学生の安否確認の方法や留学生会館からの避難場所などについて見直し、本学の「災害対策マニュアル」に反映させる提案を防災管理委員会に対しておこなった。</p> <p style="margin-left: 2em;">2) 留学生会館に居住する留学生と RA（レジデント・アシスタント）向けの「入居の手引き」「防災ハンドブック」「携帯用防災ハンドブック」について、緊急時の対応方法をより明確にした内容に改善し、2016年度前期から配布する準備を完了した。</p> <p style="margin-left: 2em;">3) 留学・研修参加学生に対して、保健センターと連携し「(留学前)健康状況申告書」による確認と「(帰国後)体調チェック」を新たに導入し、全員に実施した。</p> <p style="margin-left: 2em;">4) 留学中の学生の状況を複数の教職員で見守るため、学生が作成する月例報告書を国際交流センター宛に加え、アドバイザー教員宛にもメール添付で同時に提出させるように変更し、実施した。</p> <p>(2) 国際交流センターが担当する新規共通教育科目（3科目）の導入と改善</p> <p style="margin-left: 2em;">1) 「留学準備講座」「Topics in Comparative Culture」「Topics in Contemporary Japan」が新たに開講され、大きな問題が生じることなく導入された。一方で、履修者数が比較的少ない科目もあり、学生に対する周知方法を工夫するなどの改善課題が残った。</p> <p>(3) 本学協定校との連携強化と情報発信</p> <p style="margin-left: 2em;">1) 協定校との連携強化のため、本学の留学募集・選抜時期などを事前に協定校に伝達し、語学水準等の協定内容を毎年あらためて相互確認するように変更し、実施した。</p> <p style="margin-left: 2em;">2) 協定校の語学力の要求水準が厳格化する傾向があるため、新たな情報等を入手した場合、学生に対しては説明会、教員に対しては教授会報告を通じて情報発信をおこなった。</p> <p>(4) 受入れ留学生への支援拡充と情報発信</p>					

- 1) 「外国人留学生宿舎規程」を居住者の現状に即したものに改善する案をとりまとめた。
- 2) 留学生の本学における生活や国際交流センターの活動を英語と日本語で情報発信する「Facebook」ページを開設した。写真とともに月2～3回の頻度で継続的に発信した。

(5) 学生の多様なニーズを満たす留学プログラムの検討

- 1) パヤップ大学への認定留学枠を新たに追加した。言語センターと共同で、語学教育と留学を組み合わせた新プログラムの提案をおこなった。一方、検討を続けてきた「ファウンデーション・プログラム」の活用には課題もあり、慎重に精査することとした。そのため、他の有望なプログラムを新たに模索する課題が残った。

以上

(1) 国際交流センターの危機管理体制の整備

留学生が安全に学習できる環境の整備を積極的に進め、また本学から留学する学生を学部・学科で見守る体制を整えた点は評価できる。引き続き安全対策の拡充を期待したい。

(2) 国際交流センターが担当する共通教育科目（3科目）の改善

少数履修者科目に対応した取り組みは評価できる。受講生が興味を持ち、口コミを通じた履修者増加を期待したい。

(3) 本学協定校との連携強化と情報発信

相互確認を毎年行う形に連携強化を行い、協定校の要求する語学水準を満たすよう、努力している点は評価できる。学生の語学力に対応した、協定校の更なる提携を期待したい。

(4) 受入れ留学生への支援拡充

世界中から来日する留学生のニーズを、真摯に汲み取る姿勢は評価できる。安心して勉学に励むことができるよう、更なる支援を期待したい。

(5) 学生の多様なニーズを満たす留学プログラムの検討

新たなプログラムの開発など、積極的に留学を支援する姿勢は高く評価できる。学部・学科間とのスムーズな情報の共有・それに基づく学生サポートの体制整備を期待したい。

(評価者：北折 充隆)

2015年度 活 動 報 告

所 属	マルチメディアセンター委員会	職 名	委員長	氏 名	長谷川 元洋
<p>【2015年度活動目標】</p> <p>(1) コンピュータ教室での学生サポートの充実 (2) 全新入生を対象にしたマルチメディアセンター講習会の実施 (3) 2014年度に策定した manaba の利用ルールに基づいた運用 (4) Web サーバーの更新の実施 (5) 私立大学情報教育協会（以下、私情協と表す）の研究大会等の情報の共有の継続</p> <p>【上記活動における報告】</p> <p>(1) コンピュータ教室での学生サポートの充実 SA、TA による学生サポートを充実させられるよう、SA、TA の学生・院生を指導した。また、2014年度は SA が 26 名であったが、2015年度は 29 名に増員できた。</p> <p>(2) 全新入生を対象にしたマルチメディアセンター講習会の実施 2014年度に引き続き、全新入生を対象にしたマルチメディア講習会を実施した。2014年度は土曜日に実施し、出席率は 91.0%であったが、今年度は平日開催であったため、出席率は 99.6%に向上した。欠席した学生も eラーニングで講習を受講できるようにし、学生生活の円滑なスタートのための学習環境を整えた。</p> <p>(3) 2014年度に策定した manaba の利用ルールに基づいた運用 2014年度に策定した manaba の利用ルールに基づき、複数の教員が連携して指導する科目用のコース、複数年度にわたって学生を指導するためのコース、資格取得を支援するためのコース等を運用した。</p> <p>(4) Web サーバーの更新の実施 夏に、Web サーバーの更新作業を終えた。名古屋市内のシステム会社が運営するクラウドサービスを利用することにしたことで、東海大地震の大災害等により、本学キャンパスが1週間程度、停電してしまう状況であっても、学生等に情報提供が可能な状態になった。</p> <p>(5) 私情協の研究大会等情報の共有 機関加盟している私情協が提供しているオンデマンド配信サービスを契約し、国の施策や全国の他大学の教育実践への ICT 活用等の最新の情報を学内で共有できるようにした。</p>					
<p>(1) と (2) は、学生の学修全般に関わる PC スキルの獲得と向上を直接・間接に支える重要な活動となっており、今後も、効果の検証とともに、継続的に取り組んでいただきたい。</p> <p>(3) につき、manaba への全面移行後もルールに基づき利便性の向上が随所で図られてきたことは評価できる。今後も、教育・学習ニーズの多様性に応える一層の発展が期待される。</p> <p>(4) につき、災害等のリスクに備えた Web サーバーの更新が実現されたことは評価できる。</p> <p>(5) につき、他大学における ICT 活用等の最新情報など、本学の教育活動を充実させる貴重な情報源となりうるどころ、利用されてこそ意義があるものであり、関係部署への情報提供や広報強化など一層の積極的活用を促進していただきたい。</p> <p style="text-align: right;">(評価者：齋藤民徒)</p>					

2015年度 活 動 報 告

所 属	言語センター	職 名	言語センター委員会 委員長	氏 名	水野 真木子
<p>【2015年度活動目標】</p> <p>(1) 英語新カリキュラムの実施とその検証 (2) 英語の自主的学習の促進 (3) 外国語教育科目の履修促進</p> <p>【上記活動における報告】</p> <p>(1) 英語新カリキュラム実施とその検証 「英語コミュニケーション A(1)(2)」、「英語コミュニケーション C(1)(2)」で新シラバスが導入されたが、6月に実施した学生と担当教員の双方を対象とする授業評価アンケートの結果、どちらの授業についても、学生、教員ともに良い結果が出ており、テキスト・シラバスともに問題はなく、満足度も高いものであることがわかった。このことから、新シラバスに沿った授業により、教育効果が上がったと考えられる。また、入学時、1年終了時、2年終了時のCASECスコアの分析作業を中心に、英語カリキュラム全体の教育効果について把握、検討した。</p> <p>(2) 英語の自主的学習の促進 TOEIC 科目である「英語コミュニケーション F(1)(2)」を、2015年度から半期で履修できるようにしたことにより、学生のニーズにより柔軟に対応できるようになった。2016年度は科目名を変更して「英語コミュニケーション F」「英語コミュニケーション G」とすることで、その意図がより明確になるようにする。 TOEIC 受験の促進という点においては、受験者数は横ばい状態が続いており、思ったほど効果は見られなかった。今後は、就職活動における TOEIC スコア有用性について、より積極的に学生にアピールするための工夫を行い、受験に対する学生のモチベーションを高め、自主学習への意欲向上につなげる。</p> <p>(3) 外国語教育科目の履修促進 外国語教育科目と文化関連の講義科目（共通教育科目、国際情報学科および外国語コミュニケーション学科の専門科目の中から選定）のつながりを学生向けに分かりやすく示すマップの作成準備を進めた。マップは2016年度4月の初回授業で外国語科目履修者に対し配布する。</p>					
<p>(1) については、英語新カリキュラムが実施され、新シラバスに沿った授業により教育効果があがったと考えられるということで、高く評価できる。</p> <p>(2) の「自主学習の促進」については、TOEIC 科目である「英語コミュニケーション(1)(2)」を半期で履修できるようにしたことは一歩前進となったが、TOEIC 受験の促進という点において効果が見られなかった。報告に述べられているように、来年度はさらなる取り組みが必要であろう。</p> <p>(3) については、一定の効果が期待できるが、2016年度の結果を待って評価することになるであろう。 (評価者：山脇一夫)</p>					

2015年度 活 動 報 告

所 属	文学部自己評価 委員会	職 名	委員長	氏 名	高野祐二
<p>【2015年度活動目標】</p> <p>(1) 高校生を対象にした文学部イベント企画の具体化 (2) 外国語系学科志望受験生確保のための方策の検討 (3) FD活動</p> <p>【上記活動における報告】</p> <p>(1) 高校生を対象にした文学部イベント企画の具体化 「ビブリオバトル」を中心としたイベントを企画する予定で検討を進めたが、いきなり幅広い高校生を対象に実施するのではなく、まずは一部の高校生を対象に限定的にパイロット企画を実施する方向で検討中である。</p> <p>(2) 外国語系学科志望受験生確保のための方策の検討 2017年度に予定されている英語英米文化学科と外国語コミュニケーション学科のカリキュラム改訂に合わせて、両学科の魅力を高め受験生確保に資する改革案を出せるよう、学科主任、入試広報部および外部の業者と話し合いを持った。また、この改革に必要な大学からの支援に関する要望を学長に提出した。</p> <p>(3) FD活動</p> <p>1) 教育FD 「学生の基礎力向上を目指して」について教育に関する学科別協議会において各学科で検討した内容を文学部FD研修会で報告し、各学科の現状と課題等を共有する機会とした。</p> <p>2) 研究FD 文学部研究交流会において桐原健真准教授が研究発表（「帝国」の誕生：翻訳と誤読）を行い、意見交換を行った。</p>					
<p>2015年度活動目標（1）について：文学部イベント企画の検討を慎重に進めており、パイロット企画の実施が具体的に計画されていることは評価できる。一部の高校生を対象とした企画の早期実現が望まれる。（2）について：外国語系学科志望受験生確保に向けて、英語英米文化学科と外国語コミュニケーション学科のカリキュラム改訂が検討されたこと、関係者間で話し合いを持ち、要望を学長に提出したことは評価できる。（3）について：教育FD活動・研究FD活動ともに、2015年度の活動目標を計画どおり順調に達成したことは高く評価できる。</p> <p style="text-align: right;">（評価者：宗方比佐子）</p>					

2015年度 活 動 報 告

所 属	生活環境学部 自己評価委員会	職 名	委員長	氏 名	古寺 浩
<p>【2015年度活動目標】</p> <p>(1) 初年次導入教育の取り組み推進 (2) 学部内就職支援の取り組み (3) 学部内情報共有の仕組みづくり (4) 同窓会との連携強化</p> <p>【上記活動における報告】</p> <p>(1) 初年次導入教育の取り組み推進 2015年度より新カリキュラムがスタートし、3学科それぞれに演習科目を用いた新たな初年次導入教育を開始した。それぞれの教育手法や課題を共有し、意見交換するために以下のようなFD研修会を実施した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■7月8日(水)FD講演会：ベネッセコーポレーション「初年次教育の全国動向」 ■10月14日(水)FD報告会：各学科教務委員・FD委員「初年次教育の検証」 <p>(2) 学部内就職支援の取り組み 学科ごとに企画・運営しているキャリア懇談会(3年生を対象とした卒業生・内定在学生による就職やキャリアに関する説明会)を予告掲示し、関心あるすべての学生の参加が可能となるようにした。もう1つの目標として挙げていた就職活動時期の後ろ倒しに対する説明会開催などの新たな取り組みは、できなかった。</p> <p>(3) 学部内情報共有の仕組みづくり Googleカレンダーを埋め込んだ「生活環境学部教授会」と題したGoogleサイトを立ち上げて教授会メンバーに公開し、会議やその他のイベント、教授会や各種委員会の課題や検討事項を共有する仕組みを構築した。このサイトを用いて、KMP21に伴うW3棟の設備や引越に関する情報の共有もできた。</p> <p>(4) 同窓会との連携強化 2015年度は、家政学部・生活環境学部同窓会「野のはな」の15周年総会が開催されたため教員の出席を促したところ、出席者が4名あり、同窓生らとの交流ができた。2015年度卒業予定者発表日(3月1日(火))に、「野のはな」執行部メンバーと4年生各クラス同窓会委員との昼食懇親会を本学で開催し、同窓会への若手参加を促す策について話し合いの場を持った。</p> <p>3学科それぞれに演習科目を用いた新たな初年次導入教育の取り組みやそれを推進するための活発なFD活動の積極的な実施は高く評価できる。就職に対する積極的な支援の取り組みとして、キャリア懇談会の開催とその懇談会への学生への呼びかけも高く評価することができる。また、学部内教職間の情報共有への仕組みづくりや同窓会との連携の強化といった学部内外での積極的なコミュニケーションの構築について、その効果に期待したい。(評価者：日野知証)</p>					

2015年度 活 動 報 告

所 属	国際情報学部 自己評価委員会	職 名	委員長	氏 名	大 橋 陽
<p>【2015年度活動目標】</p> <p>(1) カリキュラムの見直し (2) 学科統合の利点を活かしたプロジェクトの推進 (3) K I T (Kinjo International Training) の運営の見直し</p> <p>【上記活動における報告】</p> <p>(1) カリキュラムの見直し 2012年4月の国際情報学部設置以来の教育・研究活動を踏まえ、カリキュラムの見直しを実施した。具体的には、カリキュラム改革等検討作業グループを設置し、学部教員からの意見を集約するとともに、在学生等幅広い観点からの評価を反映させた新カリキュラムを作成した。</p> <p>(2) 学科統合の利点を活かしたプロジェクトの推進 学科統合の利点を活かした幅広い意味におけるプロジェクトの推進をはかった。W L I や K I T における両コースの教員による企画・運営、ゼミ活動における両コース学生による協働、卒業論文・卒業制作発表会など、完成年次を迎えて多くの成果が生まれている。</p> <p>(3) K I T (Kinjo International Training) の運営の見直し K I T の運営体制を見直した。具体的には、1つのプログラムを入れ替えることでより質の高い海外研修を提供できるようにした。さらに、プログラムごとに国内カウンターパート教員を新たに設置することで、教員の引率負担の公平化に向けて前進し、危機管理体制の改善をはかった。</p>					
<p>(1) 2015年度に完成年度を迎えた新カリキュラムについて総合的な観点から見直しをはかり、更に新しいカリキュラムを作成した点は大いに評価できる。効果を期待したい。</p> <p>(2) 学科統合による教育上の利点が様々なプロジェクトにおいて教員、学生の協働的な活動としてあらわれており、評価できる。</p> <p>(3) 学科の柱となるプロジェクトの K I T 運営について、教員の負担の公平化、危機管理体制の向上など、改善が引き続き継続的に行われていることが評価できる。</p> <p style="text-align: right;">(評価者：藤森清)</p>					

2015年度 活 動 報 告

所 属	人間科学部自己評価委員会	職 名	委員長	氏 名	中野 修身
<p>【2015年度活動目標】</p> <p>(1) 学部・各学科における専門教育の充実</p> <p>(2) 学部FD活動の推進</p> <p>(3) 学部の専門性を生かした社会貢献についての検討</p> <p>【上記活動における報告】</p> <p>(1) 学部・各学科における専門教育の充実 当初予定していた、専門教育と連携した共通教育のあり方を検討するための学生に対するアンケート調査は今回実施することができず、2016年度以降の課題とした。 学部・学科の専門教育のあり方（内容・方法等）については、学部FD講習会において、本学への着任が新しい教員による授業体験や教育経験に関しての報告がなされ、今後の検討のための示唆を得ることができた。</p> <p>(2) 学部FD活動の推進 教育方法の改善の一環として、学生の受講態度における問題点の把握と教員の対処法に関する検討、並びに新校舎をはじめとする大学諸設備のより効果的な利用のための意見交換に関して、2015年度は学部運営委員会において行い、学部構成員全体での検討は2016年度に実施することにした。 教員の研究活動の活性化のための専任教員による研究発表会を、学部FD講習会において実施した。</p> <p>(3) 学部の専門性を生かした社会貢献についての検討 2015年9月に開設されたKIDSセンターの運営状況に関して、学部FD講習会で報告がなされた。そこでは、学部3学科の教員、学生が様々な形でサポートしている現状、さらに今後どのような支援が学部・学科として可能かなどの具体的な提案もなされ、2016年度も引き続き検討を続けていくことになった。</p>					
<p>(1) 専門教育において新しい情報を共有化する姿勢が見られる点が評価される。2015年度実施予定だった学生対象のアンケート調査の着実な実施とともに、専門教育のさらなる充実が期待される。</p> <p>(2) 教育面における課題について、学部運営委員会で議論されたことが実現されることが期待される。他方、研究活動活性化のために専任教員の研究発表会を実施したことは高く評価できる。</p> <p>(3) KIDSセンターを学部・各学科がサポートしており、本学の社会貢献や地域連携におけるプレゼンスを高める役割を果たすことと思われる。</p> <p style="text-align: right;">(評価者：大橋 陽)</p>					

2015年度 活 動 報 告

所 属	薬学部自己評価委員会	職 名	委員長	氏 名	日野 知証
<p>【2015年度活動目標】</p> <p>(1) 自律学習できる医療人を目指した教育の実践 (2) 実務実習の円滑な実施の維持 (3) 地域等への社会的貢献 (4) 薬剤師国家試験受験に向けた準備 (5) 志願者増対策と入学定員確保へのとりくみ (6) 薬学教育評価機構による第三者評価への準備</p> <p>【上記活動における報告】</p> <p>(1) 自律学習できる医療人を目指した教育の実践 自分で考え、判断する力が身につくよう、低学年から指導を徹底し、薬学基礎知識の定着を図った。具体的には薬学セミナー(1)～(6)及び薬学PBL(1)、(2)における指導の強化、春期及び夏期の休暇時における課題の適用等である。</p> <p>(2) 実務実習の円滑な実施の維持 愛知県薬剤師会、病院薬剤師会等の関係諸機関および県下4大学薬学部との連携で、実務実習は滞りなく進められた。</p> <p>(3) 地域等への社会的貢献 例年通り、日本薬学会東海支部講演会を金城学院大学で5回開催した。第61回日本薬学会東海支部総会・大会及び第25回日本病院薬剤師会東海ブロック・日本薬学会東海支部合同学術大会2015での成果報告を通じて、東海地区の薬学研究・教育の発展に貢献した。特に後者は11月1日に金城学院大学で開催し、盛況であった。その他の愛知県薬剤師会主催の学習会や守山区内の薬剤師研修行事にも参加して、地域に貢献することができた。</p> <p>(4) 薬剤師国家試験受験に向けた準備 第99回・100回国家試験の結果を踏まえ、他大学の国試対策情報等を参考に、第101回国家試験に向け、自律学習を目指した指導を行った。4年次生の薬学共用試験についても、自律学習ができるよう指導した。 1～3年次学生に対しても薬学共用試験及び国試に向けて自律学習ができるよう指導した。</p> <p>(5) 志願者増対策と入学定員確保へのとりくみ 定員確保を目指し、以下の活動をした。 1) 高校訪問やオープンキャンパスでは、本学の特色、魅力を伝え、本学薬学部への関心を深めることができるような情報提供をした。 2) 薬学部見学、出前授業等の要望に応えた。</p> <p>(6) 薬学教育評価機構による第三者評価への準備 2018年度あるいは2019年度に薬学教育評価機構による薬学教育評価を受審するために、必要書類等の保管に努めている。また、「第三者評価をうけるための準備委員会」の活動の一環として、教員及び事務職員が同志社女子大学に出張して情報収集を行った。</p>					
<p>学部独自の明確な教育目標のもとに学生指導を実践し、また実務実習の実施や国試対策の準備に学部全体として取り組んでいることは高く評価することができる。</p> <p>地域貢献活動として、本学を会場とした講演会の開催、薬剤師研修行事や学習会への積極的な参加等は評価できる。</p> <p>入試における定員確保への取り組みとして、薬学部見学やオープンキャンパス、高校訪問を積極的に実施していてその効果が期待される。(評価者：中野修身)</p>					

2015年度 活 動 報 告

所 属	文学研究科自己評価委員会	職 名	委員長	氏 名	藤森 清
<p>【2015年度活動目標】</p> <p>(1) 教育研究交流の促進 (2) 学生の学外学会発表の促進 (3) カリキュラム改訂の検討と定員確保の取り組み</p> <p>【上記活動における報告】</p> <p>(1) 教育研究交流の促進 2015年11月26日に大阪大学大学院国際公共政策研究科准教授、ヴァージル・ホーキンス氏を招き、講演「国際報道の明暗—なぜ世界の現状が伝わらないのか—」を開催した。これは大学院文学研究科講演会第4回にあたり、学外からの参加者も含め約百名の参加者を得た。講演には、英文学専攻の学生による同時通訳も行い、文学研究科の国際的な研究活動を学内外に紹介するとともに、英文学専攻通訳翻訳領域の教育実績を示すこともできた。</p> <p>(2) 学生の学外学会発表の促進 2013年度に制定された金城学院大学大学院学生学会発表旅費交通費助成の利用者は、社会学専攻1名だけであった。2014年度の2名からさらに減ってしまった。制度利用の促進のために、制度の周知徹底以外に教員による学会発表の奨励に心がけたが、成果が得られなかった。</p> <p>(3) カリキュラム改訂の検討と定員確保の取り組み 在学学部生向け説明会などを通して受験生確保に努力したが、2016年度入学生は、2015年度を下回った。専攻主任会議やFD委員会などを通して受験者数が伸びない原因を検討した。学部カリキュラム構成との不整合や、他大学院進学学生の増加などの問題や傾向が指摘された。2016年度以降、カリキュラム改訂を含めた具体的な対策案作り作業の必要性が確認された。</p>					
<p>(1) 継続的な講演開催による研究交流促進に加え、会場での学生による同時通訳は、教育実績の対外的評価を高めるとともに、教育的効果の面からも高く評価できる。</p> <p>(2) 2015年度の助成利用学生が減ってしまい残念である。2016年度以降の奨励策とその成果に期待したい。</p> <p>(3) 2016年度入学者数が、2015年度実績を下回ってしまったが、専攻主任会議やFD委員会などを通してその原因を探り、問題や傾向の指摘に結びつけたことは評価できる。2016年度以降のカリキュラム改訂を含めた具体的な対策案作りに期待したい。</p> <p style="text-align: right;">(文責 古寺浩)</p>					

2015年度 活 動 報 告

所 属	人間生活学研究科 自己評価委員会	職 名	委員長	氏 名	宗方 比佐子
<p>【2015年度活動目標】</p> <p>(1) 学生の研究活動の活性化 (2) 研究指導充実にに向けたFD活動の推進 (3) 広報活動の強化</p> <p>【上記活動における報告】</p> <p>(1) 学生の研究活動の活性化 学生の研究活動に対する積極性を育成するため、各指導教員が指導生に対して積極的に金城学院大学大学院学生学会発表旅費交通費助成制度の活用を促した。その結果、2014年度における上記制度利用者4名に比べ、2015年度は6名と若干の増加がみられた。 学生の研究活動を活性化するため、研究発表会を2015年10月24日(土)に実施した。14名の学生がポスター発表を行い、有意義な研究成果発表の機会となった。</p> <p>(2) 研究指導充実にに向けたFD活動の推進 2016年3月7日(月)開催の大学院FD講演会において、テーマの一部を「大学院における研究指導の在り方」とし、研究指導について考える機会とした。また、人間生活学研究科では専攻によって専門領域が大きく異なるため、専攻ごとに研究指導に関する問題点の現状とその解決法について討議する機会を設け、指導体制の強化・充実を目指した。</p> <p>(3) 広報活動の強化 2015年4月13・14・15日の3日間、大学院進学を検討している在学生向けの大学院説明会を実施した。<u>延べ</u>36名の在学生(1年13名、2年6名、3年12名、4年5名)が説明会に参加した。参加者に対して、大学院での学習や入試に関する説明を行うとともに、個別の相談指導も実施した。また、オープンキャンパス時には、学内外の来訪者を対象とした大学院相談窓口を設置し、個別の相談に応じた。近年の大学院入学者減少について、要因分析と入学者増加に向けた活動を引き続き強化する必要がある。</p>					
<p>(1) 指導教員の努力により、大学院生の学会発表旅費制度利用者が6名に増加したことは評価できる。さらに、学内の研究発表会を実施し、14名の大学院生がポスター発表を行ったことは素晴らしい成果である。</p> <p>(2) FD講演会を開催した点および専攻ごとに研究指導の問題点と解決法について討議する機会を設けた点は評価できる。</p> <p>(3) 在学生向けの大学院説明会を開催し、延べ36名の参加者に対し大学院に関する説明と個別の相談指導を行った点は高く評価できる。さらに、オープンキャンパスで学内外の来訪者を対象に大学院相談窓口を設置し、個別の相談を行った点も評価できる。(評価者：高野祐二)</p>					

